

〔史料紹介〕

鶴屋有節宛平田鉄胤書翰四通をめぐって

沼田 哲

一、はじめに

平田鉄胤が弘前の門人鶴屋有節に宛てた書翰四通¹⁾を、長谷川成一氏より託されてからかなりの月日が経ってしまった。折々にその解説を手がけて見たところ、なかなか興味深い内容を有していることもわかり、今回これら書翰の紹介を試みることにした。²⁾

さて平田鉄胤についてはことさらに説明するまでもないと思われるが、篤胤の養子となつて以後、義父を助けて家塾気吹舎の経営を支え、天保一四年篤胤が秋田に没した後は、平田国学を学ぼうと入門する弟子達をすべて篤胤没後門人として扱いながら、幕末・維新时期に広く平田国学を普及・展開し、多数の門人を集める卓抜な組織力、指導力を示したことは注目すべきである。しかしこれまでにならぬ形での鉄胤の伝記は作られていないため、幕末平田派の動向が政治的にも無視し得ないにもかゝらず、従来の研究では主として門人達の活動を対象とした研究が中心となっており、その中核に存在していた平田鉄胤の活動などについては、殆んど明らかになつていないと言えよう。本稿は平田鉄胤の研究を志すものではないのだが、鉄胤書翰の紹介には何がしかの意味がある

のではと思つていたところ、最近宮地正人氏は「幕末の政治過程と平田国学の相互関連を、平田鉄胤・延胤父子を主軸とする政治情報の流れのなかから」考察するという視角から注目すべき論文を発表された³⁾。その中で氏は、平田鉄胤が入門した各地の門人達一人一人に対し数多くの書状を認め、江戸その他の情報を伝えていることに触れ、例えば天保元年に入門した奥州相馬小高郷の神職高王民部に対して、弘化二年から明治一二年の間に一六一通もの書状を書き送っていることを挙げ、「平田門下全体に対してはおそらく膨大な点数に達した」であろうこのような鉄胤の超人的とも言える通信活動の意義を、「すくなくとも書通した数だけの来信・礼状があつたはずであり、そこには江戸情報や篤胤書籍に関する質問ともに、発信者生活地域の情報も多くもりこまれていたと思われる」、「平田派門人から鉄胤の許に流入する直接的・間接的な政治情報は、幕府・諸藩の権力的情報収集網を除外すれば、質量ともに当時最大級のものであつたといつてよい」と述べている⁴⁾。この指摘は幕末平田国学の検討に対する新しい視角を提示したものであり、本稿を草するにあつて多大の刺激を受けた。もちろん本稿は鉄胤↓門人における情報や指導を見ることになり、宮地氏の分析対象とは当面逆のベクトルであるのだが。

次に本稿の鉄胤書翰の宛先である鶴屋有節及び津軽・弘前地方の平田門人についても若干の紹介をしておきたい。

『青森県人名辞典』には、「津軽藩旧記伝類」を典拠として、鶴屋有節について次の如く記している。

「鶴屋有節（つるや・うせつ）文化五―明治四（一八〇八―一八七二）

幕末津輕の俳人。弘前の商家鶴屋宇兵衛の次男。本姓武田。通称乙吉また音吉。千載庵と号す。幼年から豪商伊香八太郎に仕え、毎夜内海草坡につき俳諧、漢籍を学んだ。草坡の死後は三谷句仏に従う。俳諧、和歌をよくし、津輕順承の句作に点をつけるよう命ぜられたという。国学を好み、安政四年（一八五七）友人岩間滴、今村真種らと江戸の平田鉄胤（かねたけ）に入門し、なおその父篤胤（あつたけ）没後門人帳に名を連ねた。著書「磯の白玉」四五冊、「巖幽楽論」一冊その他数十部がある。」

そこで次に気吹舎門人帳にあたったところ、

「陸奥国津輕郡弘前 五十歳

安政四年丁巳二月廿五日 有節判 鶴屋乙吉」

という記載を確認できた。（彼の入門に際して紹介者名がないが、そのあたりの事情は後掲書翰1番によって察することができる。）

入門後彼はすぐに、岩間市太郎（滴）¹⁷、三谷治平（大足）¹⁸、藤岡幸太郎、殖田平吉（以上安政四年閏五月入門）、今村要太郎（真種）¹⁹（同年六月十一日入門）を紹介入門させている。なお念のため門人帳を遡及して検索してみたが、鶴屋が津輕地方における平田門への最初の入門者であった。

鶴屋はその後、竹田清次郎（文久二年）、小野若狭、笹木淡路、笹木健作、平尾初三郎（魯仙）³¹（以上元治元年）、兼平亀綾女（慶応二年）、下沢八三郎（保躬）¹³（同三年）を夫々紹介入門させており、実に、明治四年迄の津輕地方における平田入門者十八名のうち十二名が鶴屋有節の紹介による入門ということになっており、彼が津輕における平田没後

門人の中心的存在であることは疑い得ないようである。その意味においても、この四通の鉄胤書翰の紹介は、津輕における平田国学受容の情況を知る好材料でもあると考える次第である。

（なお以下紹介にあたっては、各書翰の年次を推定し、また釈文作成においてできる限り原文の表記を生かした。また原文の改行箇所については文中に／を入れて示すこととした。また文中特に書籍名については正しい名称に（ ）で補ったりしてある。更に文中の事項についても必要と思われる限り注を付した。）

二、各書翰の紹介

1 （安政三年）九月十二日付

又申候、鶴屋と御称候ハ御家号カ／御名字カ、若御家号ならバ御名字／后便御記し可被下候、

六月廿八日及び七月十九日出之／御追書共、先月十八日、立山松蔵と／申ス御仁拙方込御持参、則拝見／いたし候、先以其頃暑氣御座候所、／貴家御揃愈御安全之趣、且其後／追日冷氣相成候得共、定而御壮栄之／御事と重畳奉賀候、次ニ當方無／別儀罷在候、御休意可被下候、扱如命／昨年中始而預御書通、段々御篤／志殊ニ此度も御国産蛤白干／菫箱御恵被下、結構之御品毎々／御懇志不浅辱奉存候、早速／先人霊前へも相供申候、乍去遠方／御心配之程、何共痛入候義ニ御坐候、一、御懇書之趣一々尤至極、辱ク／承知いたし候、逐一御報ハ不申述候／得共、大略左ニ得御意候、

一、秋田表小笠原見龍方之儀者／御承知御坐候得共、當方へ直々御書通／之方却而御便利之趣御尤ニ御坐候、／當方ニ而ハ少しも迷惑之筋ニ無之／候間、無御遠慮可被仰下候、諸国文／通是のミ忙かしく候得共、追々学／業の弘まり候事故、煩勞少しも／厭ひ不申候、

一、新田周轉と申者、是も篤志之者ニ／御坐候、書物も相應ニ持居候得共、学業／繁多故、御不便ニも可有之と存候、

一、古史傳も七卷御手ニ入候由、其外／一々御書付之趣順々御望も御坐候得共、／未タ御藏本ニ無之分ハ、何レハなり共／都合次第差出し可申段、委細被／仰下具ニ承知いたし候、仍而ハ右／一々書留置、其外品々追々差／上可申候、此段御承知可被下、此度古史／傳始メ成丈取揃へ差出し可申候、御／受取可被下候、

一、右書物料として此度金三兩也／御差越し、慥ニ受取申候、跡ニ而も宜候所／御入念候御事ニ候、追々差引／勘定為致、其趣書付ニいたし差出／候様可致候、

一、写本之事、何方も御急キニ候得ども、／當方ハ諸方引受候儀、筆工等随分／出情、勿論數十人有之候得共、思ふ／如くニハ手廻り不申、前後も有之、／不出来も不少、それら兼而御勘弁／被下度候、

一、先代之事、御篤志ニ付御尋之事／共承知いたし候、御承知之通り、謚号ハ神靈能／真柱大人ニ候、没故ハ天保十四年閏九月／十一日、行年ハ六十八才也、安永／丙申年の生れニて候、靈祭等をも／御営ミ、画像御用之よし御尤ニ存候、／乍去右画像ハ秋田人の書キ候物ニ而、／よく似たる由人々申候得共、先人の／心ニハ叶ひ不申候事も有之、夫故當方／ニ而ハ画像ハ用ひ不申候、謚号者／神祇伯御家ハ賜り候事、

且御／振筆被成下候間、右を靈祭二者／相用ひ申候、其外自身好之品も有之、／右をも相用ひ申候、扱又年譜之事／御尋、右ハいまだ清藉相成不申候、尤も／兼而用意ハ有之候得共、古史傳始メ／草稿類清書いまだ終り不申候故、／年譜延引相成申候、

一、此度出来合、又新規注文ニ而出来之物、／其外近比上木之物共、取集差出し候物／左之通り、

(古史) 傳 五冊 十六分二十込

毀譽相半書 一

三易由来記 二

以上写本

玉櫛八ノ卷 一 但し七ノ卷ハ御所持のよし

神代系図 小折本 一帖

大祓詞增加本 一帖

天津祝詞考 一冊

八家論 一枚

皇祖宮所考 是ハ頼まれもの也 一冊

以上板本

右写本ハ御目錄有之、板本ハ御書目／無之候得共、何レも近比上本いたし候、中ニは／秋田へも未タ遣ハし不申候物も有之、定而／御持合無之と存候間差上申候、

右之通り御受取可被下候、本料之儀者／別紙ニ有之候、

一、御注文写本物之内、年中神祭詞記／玉櫛二ノ卷 幹支字原考 孔子／聖説考 天柱五岳論下卷

右等ハいまだ清書相成不申候間、出来迄／延引相成申候、扨皇国異称考と申者、／以前の大扶桑国（考）同様二候、是ハ御所持／無之哉、后便御左右可被下候、但し今ハ板本出来不申候、

五十音義訣四 三五本国考三 / 神字日文傳三

以上三部ハ近々為写差出可申候、／扨右等之外ハ此度写本ニ而此節出来／可申分書目一葉、及び板本ノ分書目／一枚差上申候、右御覽之上御注文可／被下候、且板本之内摺り物様之ものハ、／此内ニて洩れたるも式三程ハ有之候事／

先者右御報旁如此御座候、頓首

九月十二日 平田内蔵介

鶴屋乙吉様

尚々追々冷氣相増申候、折角／御自愛御凌專要ニ奉存候、

一、七月下旬御地辺地震ニ御座候よし、／秋田も大分震り申候、如何御座候哉、御案／思申候、御左右承り度候、扨又當地ハ先月／廿五日夜南風甚猛烈ニ而、雨も強く、家屋多く／破損顛倒も不少、死亡も数多有之候、／所ニ今昨年之地震分も甚敷御座候、誠ニ／度々の天変地妖恐怖至極之事ニ候、／乍去拙方杯ハ格別之痛ニも無之、勿論／怪我等一切無之候間、御安意可被下候、

一、此度之御懇書再三拝誦いたし候へ者、／御地ニハ是迄一人も知己無之、南部ニハ／懇意も有之候得共、貴地ハ文通いたし候／人も無之候、就而ハ内々得御意候、是迄／先人親筆之物何ぞ御所持御坐候哉、／尤も差たる物無之、追々扨底ニ相成候／得共、御望ニ候ハ、何欵進上可致哉、但シ／門人外ハ先ツハ贈り不申候得共、貴君ニハ／格別之御

執心と存候間、此段得御意候、／何卒御考之通り、貴地ニも同志之方々追々出来候様何々希ひ申候、／猶色々申上度義御坐候得共、日夜甚繁業、／寸暇も無之、様々乱略之書面御宥恕可被下候、再拜、

まず本書翰の年次であるが、推定の根拠は実は本書翰の帯封に異筆で「安政三年九月十二日」とあるため、とりあえずそれを採用した。更に尚書きの文中に「当地（江戸）ハ先月廿五日夜南風甚猛烈」で被害が大きき「所ニ今昨年之地震分も甚敷御座候」とあるところの「昨年之地震」を安政二年十月の江戸大地震に比定しても矛盾はないと考えたことによる。

さて年次をこのように推定すると、「如命昨年中始而預御書通」とある如く、鶴屋有節が最初に鉄胤に手紙を出したのは「昨年中」つまり安政二年だったらしい。鉄胤によれば「御地（弘前）ニハ是迄一人も知己無之、南部ニハ懇意も有之候得共、貴地ハ文通いたし候人も無之候」と、津軽・弘前には従来まったく足がかりもなかったことから、鶴屋に対して大変丁寧に対しては様子が見える。「就而ハ内々得御意候、是迄先人（篤胤のこと）親筆之物何ぞ御所持御坐候哉、……但し門人外ハ先ツ贈り不申候得共、貴君ニハ格別之御執心と存候間、此段得御意候」という好意を示しているが（勿論これが勧誘の手段であつたと解することもできるが）、それも「貴地ニも同志の方々追々出来候様何々希ひ申候」との鉄胤の率直な気持ちが為せるところであろうか。実際、翌年二月鶴屋は入門し（このような事前の書通があるため紹介者無しでの入門となつたのでろう）、更に多くの弘前の人々を紹介入門させるに至ったことは

前述の如くである。

次に注意を惹いたところは鶴屋達が篤胤の「靈祭をも御営ミ、画像御用之由御尤ニ存候、乍去右画像ハ秋田人の書き候物ニ而よく似たる由人々申候得共、先人の心ニハ叶ひ不申候事有之、夫故當方ニ而は用ひ不申候」と鉄胤が述べている件りである。この篤胤の「画像」については後掲4番書翰にも言及があり、あわせて検討したく、ここでは指摘するだけにとどめておきたい。

他の鶴屋宛書翰でも同様なのだが、篤胤書籍に関する情報が豊富であることが特徴的であろう。本書翰でもっとも興味深いのは、「書物料として此度金三両也御差越し、慥ニ受取申候……追々差引勘定為致、其趣書付にいたし差出候様可致候」という書籍代金支払、精算の仕方がわかることや、「本料之儀者別紙ニ有之候」とか、「此度写本ニ而此節出来可申分書目一葉及び板本ノ分書目一枚差上申候、右御覽之上御注文可被下候」という如く、書籍の値段表や出版目録の様なものが存在することである。この点については、谷省吾氏の研究¹⁸で紹介されている「大壑平生著撰書目」や「蔵板入費」という江藤正澄による写しや、「平田大人並門人著述書入費目録」（明治四年、一枚摺）などが参考となる。「蔵板入費」については、「安政三年辰三月宮崎大門之本もて写せる一卷」をもとに、慶応二年江戸で写した別のものと、明治二年十一月に比較を加えた、という如く、安政三年頃には、いわば書籍の価格表ともいえるべき書類が門人の間に流布していたことがわかる。本書翰には残念ながらこのような別紙は含まれておらず、実態は不詳であるが、おそらく同様のものであったろうと考えられる。気吹舎の出版活動と門人への篤胤書籍

の頒布は、かなり組織化されていたとも考えられる。この点は、「写本之事何方も御急キニ候得ども、當方ハ諸方引受候儀、筆工随分出情、勿論数十人有之候得共、思ふ如くニハ手廻り不申」との鉄胤の弁から、當時気吹舎では筆工を「数十人」使用して、筆写の注文に応じている状況からも知ることができよう。

さて書籍の送付等については、

①今回鶴屋方へ送る書物として、

古史伝五冊、毀誉相半書、三易由来記（以上は写本）、玉櫛八之巻、

神代系図小折本、大祓詞増加本、天津祝詞考、八家論、皇祖宮所考

（以上板本）が挙がっている。²¹

②鶴屋が依頼した書物のうち、今回は筆写が間に合わず送ることができなかったものとしては、

年中神祭詞記、玉櫛二之巻、幹支字原考、孔子聖説考、天柱五岳論考
下巻、皇国異称考、五十音義訣、三五本国考、神字日文伝、が挙げられている。

いずれにしても鶴屋の依頼書目はかなり雑多であり、あまり系統的でないことは気になるところである。また篤胤の書籍は前掲の目録によっても一〇六種その他二八種を数えることができ、その刊行の努力はなされていても、大部分は筆写に頼る他なかったこともわかる。

2 （安政五年）八月一九日付

幸便ニ付一筆啓上、先以此節不／同之時候御坐候得共、貴家御揃愈／御壮栄可被成御起居恭賀候、／次ニ當方無別義罷在候、乍慮外／御休意

可被下候、然者先頃中三月／六日、四月一七日、六月十五日以上三度／書物類差出し申候、定而追々相届候／事と存候、扱又先頃ハ武田ぬし／上下共御尋被下辱、乍去毎々御□ニ／申候、又秋ハと御噂も御坐候、如何候哉、御序ニ／宜敷御傳声可被下候、

一、例之外夷共、アメリカ ロジャ アン／ゲリ共、先月中次々退帆いたし候、／此節フランス渡来罷在候、乍去／彼等願之隨ニ御聞届故至而／無事、往々之所ハ不知、先無異ニ而／宜敷候、然ルニ先月比ハ惡疾／流行、世間□□混雜いたし候、定而御／聞及も候はん、全く夷狄ニ属来り候／妖魅之所為と被存候、第一／大樹公右ニ而御他界之由、夫とハ不申候／得共、變病故毒殺など、申候噂も有之候／事と被察候、先月末ハ當月かけて大ニ／弘まり、日々数千人死亡いたし候、／其病たるや、初め胸痛或ハ腹痛／いたし、忽ニ下痢忽ニ疲勞、大抵半／日程ニ而落命いたし候、又其内ニ狐族の／物の憑も御坐候、其形状を見たりと／云者も有之候、勇氣之者強而責問／候へハ、アメリカニ付て千匹渡来せし／由申もありと申候、また其虚ニ乗じ、／日蓮の宗徒狐を付るもありて、忽ニ召／捕られたる妖僧も有之、大混雜ニ御坐候、／御地辺ハ定而なき事と存候へ共、追々／北ニ移り候様子故、随分御用心可被成候、／至而急症故、初ハ療方をも不覚候／所、此節ハ手馴候者も有之、始め腹痛／之節、芥子の粉^{カラシ}ニうどんの粉三分一／程加へて水ニ而練り、木綿或ハ麻布の／きれニ厚くぬり付、あばら骨を除て、／其下ヘ大ク腹一杯ニはり付へし、乾キ／たらバ張替べし、而して一晝夜程も／過候へバ、死亡無之よし、右ハ第一之療／方と申事ニ御坐候、御心得込ニ申上候、／抑佛法渡来之節も惡病流行、／其外蕃夷来

れハ妖鬼つき来り候／事故ニ、往古ハ其前後障神の御祭／有之候ハ、難有キ御政道と奉感伏候／事ニ御坐候、全ク夷狄之土産もの、恐るへく／憎むへき事ニ候、今時之有様慷慨歎／息之至ニ御坐候也、右ハ密カニ御同門中へ／御咄し置可被下候、穴かしこ、

扱此度御幸便、大高ぬしハ態々／御知らせも被下、何ぞ書物類差上度／存候所、御凶事彼是ニ而、筆工も手廻り／不申候、何も差上候物間ニ合不申候、仍而ハ／為差用事も無御坐候得共、先々時候之／御見廻込ニ如此御坐候、追々秋冷も相／催し可申、折角御自愛相祈り申候、頓首拝、

八月十九日

鉄胤拝

今村ぬし

鶴屋ぬし 御許ニ

上包紙

「弘前今村要太郎様 江戸 平田内蔵介

鶴屋乙吉様 用書無之

まず本書翰の年次推定の根拠は、文中の①「例之外夷共アメリカロジャアンゲリ共先月中次々退帆いたし候、此節フランス渡来罷在候」との記事、②「大樹公……御他界」との記事 ③「(惡病が)先月末頃ハ當月にかけて大ニ弘まり日々数千人死亡いたし候」との三件の記事が、①安政五年七月迄のアメリカ、イギリス、ロシアとの通商条約調印とフランスとの交渉中という事、②將軍徳川家定が安政五年七月四日死亡と發表された事、③安政五年のコレラの流行、に夫々対応していると判断

したことになる。

本書翰では、「何ぞ書物類差上度存候所、御凶事彼是ニ而筆工も手廻り不申、何も差上候物問ニ合不申候」とあるように、書籍の送付等についての記事は無い。

さて日本に初めてコレラが入った第一次流行は文政五年で、九州地方に始まり中国地方から大坂、京都に及び死者は三千とも数千ともいった。第二回目の大流行がこの安政五年で、江戸だけで八月の一ヶ月間に患者一万二千五百人を出し、翌年、再翌年の万延元年までも流行が続いて三十万もの死者を出したといわれている。そのきっかけとされたのが、安政五年長崎に來航のアメリカ軍艦ミシシッピーであると思われ、排外的国民感情を強く刺激し、「攘夷」論に火をつけたとされる。²² この書翰の中で鉄胤は、外夷の渡來と悪疾流行とを関係づけながら、「抑佛法渡來之節も悪病流行、其外蕃夷來れハ妖鬼つき來り候事故ニ、往古ハ其前後障神の御祭有之候へハ、難有キ御政道と奉感伏候事に御坐候」と述べ、「夷狄之土產もの恐るべく憎むべき事に候、今時之有様慷慨歎息之至ニ御坐候」と攘夷意識丸出しの感想を述べているところである。

またコレラについては、「其病たるや初め胸痛或ハ腹痛いたし忽ニ下痢忽ニ疲労、大抵半日程ニ而落命いたし候」とその急激な病症を報じ、「至而急症故初ハ療方をも不覚候所、此節ハ手馴候者も有之」ようになったとして、次の如き「療方」を紹介している。すなわち「始め腹痛之節芥子の粉ニうどんの粉三分一程加へて水ニ而練リ木綿或ハ麻布のきれに厚くぬり付あばら骨を除て其下へ大ク腹一杯にはり付へし、乾きたらば張替べし、而して一晝夜程も過候へバ死亡無之よし」というのであ

る。これが果たしてどれ程効果があつたものなのか、また「療方」として流布していたものなのか、など確かではないが、興味あるところである。²³

3 (安政六) 年十月廿一日付

○追而申候、靈祭之事今便申上度／存候所、何分事多ニ付手廻り兼候間、／后便申候、御待可被下候、

○宝舟と云摺ものハ、松平故越中守殿也、／一見識見へ候もの故差上候、尤も懇意の／方ニ而出來候故也、

八月廿八日御認之貴書九月^マ／相届拜見、秋冷御坐候所、貴家御始／御社中御安意之趣目出度奉賀候、／次ニ拙子八月申病氣御坐候之所、／此節ハ本復家族無異罷在候条、／乍慮外御休意可被下候、然者先此／武田主下り之節相託し候書狀御／一覽、且書物類御落手之旨も今／便被仰下、承知安心いたし候、

一、西籍(慨)論御戻之事御承知之由安／心いたし候、

一、靈祭式之事ハ、別紙ニ而御承知可／有之候、

一、太宰府建碑延引一件之事／委曲御承知、縷々御紙上之趣却而／御氣之毒痛入候事ニ候、追而／弥出來之節ハ宜敷御頼申候、

一、靈祭靈実之事御承知、安心いたし候、

一、雲上明鑑普通之本一部差上／申候、料ハ^マ

一、古史傳二帙、(午頭天王)歷神弁等御落手之よし、／安心いたし候、

一、昨年去方々御頼まれニ付被仰越書／物類差上候所、右料不足欵と御尋／御坐候へとも、不足ニハ無之候、

一、太宰府建碑御奉納金四両也御返／却之事、相済候事御承知之趣、當方ハ／無是非候得共、御手数相掛候段、くれ／御氣之毒ニ候、乍去一ト先安心いたし候、

一、今般金貳両也御差越し、正ニ落手／いたし候、又外ニ貳分三朱ト七十二文／御勘定御遣ハし、是又受取申候、／猶又別番差引御勘定書今便／差上候、

一、古史傳十帙分之、七分十二迫不足／之事心得居申候、今便差上度候所、何分／諸方手廻兼候、此次迄延引之段御聞／置可被下候、

一、百四十五段之事ハ、御推察之通ニ候、卅／一、卅二清書之節相改可申候、

一、八幡宮^{ひな}祭礼御延引之趣、御殘／念御察し申候、右二付武田主御出府／御延引之由、無御余義御事ニ御坐候、

一、(古史) 年歴編、祝詞正訓、玉櫛／四・五・六之卷、御入用之由、年歴編ハ／写しも六ヶ敷、且上木之積りニ御坐候間、／當分御待可被下候、正訓、玉櫛ハ今便差上申候、

一、寅吉此節の成行御尋、右ハ常々／医トを業とし、先ツハ塵俗之身ニ／候得共、寡欲にして酒を好ミ、人愛を／失はさる所、凡人ニハ無之候、

勝五郎も今ニ息災とハ存し候へども、／近年の行状承り不申候、近所之もの／参り候ハ、承り置可申候、

一、此(大道) 或問と申物、近比上木相成候間、六部差／出し申候、此書ハ子細有之、書肆などへは／一切出し不申候、秘書として有之事ニ候間、／御同志之外猥りニ御他見被下間敷候、／先者右等得御意度如

此候、以上

十月廿一日

氣吹舎

今村様

鶴屋様

御別番少々書入返納いたし候、

(包紙ウワ書)

「今村要太郎様

平田

鶴屋乙吉様

用書無之

(異筆)

未十月廿一日付、十一月廿一日達」

まず年次推定の根拠であるが、①これも帯封に異筆で「安政六年十月廿一日」とあること、②包紙ウワ書に異筆で「未十月廿一日付、同十一月廿一日達」とあり、この未年は安政六年と考えるのが妥当であろうということ、の二点ということで、いさゝか薄弱のようだが、一応このように考えておきたい。

書籍の送付・注文等については、

①古史伝二帖、午頭天王曆神弁を送ったが鶴屋が入手したことが確認された。

②雲上明鑑、玉櫛四・五・六卷、祝詞正訓を送ること、また「(大道) 或問」を六部送る。但し「此書ハ子細有之書肆などへハ一切出し不申候、秘書として有之事ニ候間御同志之外猥りニ御他見被下間敷候」と

あることが注目される。

③鶴屋から注文のあった「古史伝十帙分之内七々十二迫不足之事」と

「古史」年曆編について、前者は「何分諸方手廻兼候此次迫延引之段御聞置可被下候」、後者は「当分御待可被下候」とあるように、需要に対し供給が追いつかない様子がわかる。

次に本書翰中興味深い事柄は次のことであろう。すなわち鶴屋から問われたらしく「寅吉此節の成行」や「勝五郎も云々」と鉄胤が述べていることについてだが、「寅吉」とは文政三年に篤胤が山崎美成の家で知ったいわゆる「天狗小僧」のことである。篤胤は、「天狗」の弟子になつて現身で異界に往復した人間としての、この寅吉から異界の事柄について様々の話を聞き出し、それを「仙境異聞」に纏めている。篤胤にとっては「霊能真柱」において構想した人間の死後の霊魂の行方についての理論を、「事実」として裏づけてくれるものとして、寅吉の証言を重視したのであった。

また「勝五郎」とは、武州多摩郡中野村の百姓源蔵の倅勝五郎のこと、文政六年九才の時、自らは文化七年七才で死んだ多摩郡程窪村の勝蔵という子供の生まれかわりであると主張し、その前世と霊魂で居た時のことなどを詳しく語ったことが評判となり、領主の取調べなどもあったことを篤胤が知り、勝五郎を自らの家に招いてその話を聞き、「勝五郎再生紀聞」にまとめている。篤胤にとつてはその関心は寅吉の場合と全く同じである。²⁷

さて渡辺金造氏によれば、寅吉は篤胤の許に八・九年程居て、篤胤の門人にもなっているが、「氣吹舎日記」では文政十一年以後の消息は不

明であり、「其の後はどうなったのであろうか、全く世に聞こえなくなつてしまった。井上頼園翁の話には、後に平凡医者になったとある」という。²⁸勝五郎についても日記では文政十年以後の消息は出ていないと述べている。²⁹

しかし後に入門した人々にとつても、おそらく寅吉や勝五郎のことは興味深く思われたのであろう。鶴屋の質問に、鉄胤はまず寅吉については「右ハ常々医卜を業とし先ツ塵俗の身ニ候得共、寡欲にして酒を好ミ、人愛を失はざる所、凡人には無之候」と述べている。この表現からして、鉄胤は安政六年当時においても寅吉との交流があったと見ることができ、その点で事柄は小さいが寅吉についての新情報と言えよう。勝五郎については「今に息災とは存し候へども、近年の行状承り不申」と述べるが、勝五郎も当時現存していたことだけはわかる。

4 霜月十三日付

四月廿日之貴書、七月七日之御状、ともに／御幸便無之二付御延引之趣、委曲／竹田主今九月十四日之御札相添候而、／十月十七日中村茂兵衛主御持参被下／不取敢拝見、此節寒冷相成候へとも、／諸君御家内御揃愈御安全之趣、／何今目出度奉賀候、扱両通共二不／相変御懇篤之御書面、尋く拝見いたし候、／次ニ御報可申述候拙方弥無異罷在候、／乍慮外御休意被下度候、

一、閏三月之愚書、六月五日之書面とも二、／夫々相届候段被仰下安心いたし候、

一、弘仁暦運記考御落手、夫々御配分／相成候由、大慶二候、其以前

(午頭天王) 歷神弁も同様之事、

一、太宰府御建碑、弥御出来之事ニ／相成候二付、其段申上候所委曲御承知二而、／今便金四両壹分也御差越し、慥ニ受／取申候、竹田主御加ハリ、且川崎氏御／死去ニ付御息忠次郎殿といたし候事／承知いたし候、筑紫へ早速差立申候、／此度ハ無間違不遠返書参り可申候、／必出来候事と存候、御方々へ宜しく／御傳声なし置可被下候、扱又追々／御誘も御坐候外ニ、御人数も相増し可申／哉之事、別而御懇切辱く大慶ニ御坐候、／彼地之様子次第又々御頼申候事も可有／之哉、一ト先返事相待可申候、

一、先人肖像之儀、厚く御悦被下満足／いたし候、但し右肖像十分と申ニハ無之、／画工も心ニ任せ不申、先大抵ニ御坐候間、／深く御頼着ハ被下間敷候、扱右ニ付而ハ、／秋田ニ而出来之ハ拙宅家内共其外當／地之者ニハ不得心ニ候へ共、彼地之人々／よしと申居候事故、其俣ニ差置申候、／其内ニも羽織など着用ハ常之事ニハ／候へども、改マリ候節ハ嫌ひニ而、講書之節ハ必肩衣相用ひ、鈴屋大人之御霊／祭其外発会等之節ニハ水干装束／相用ひ、略し候迎ものしめ上下ハ是非／着用いたし候、勿論発会と申候而も、必ス／大人等の御肖像奉祀之事ニ候也、／是ハ御序故申上候、扱右肖像ニ付御一統金三百疋也／御贈り被下、御入念候御義辱く拝受いたし候、／宜敷御礼御傳達希候、一、今年ハ春来氣候不宜候ニ付、凶年欵之／御心配御坐候所、残暑盛りニ相成豊作之／趣、秋田なども御同様ニ而、誠ニ上下大悦／此上ハ無御坐候、実意薄キ人ハ時候之事／など不心留候物ニ御坐候所、委曲之御懇翰／感読いたし候、

一、旧年差出し候書物共入水ニ而大ニ御迷／惑之趣ニ付、少し也とも御償ひ可申と／御尋申候所、少々ち、み候へとも、欵成ニ御／間ニ合可申由被仰下、先安心いたし候、／随分行届兼候間任仰可申候、

一、平吉主千今帰国無之よし、御用事之程ハ不存候へ共、チト／長過候哉ニ被察候、如何、

一、義勇之人々所持之書付写し、大ニ御悦／被下本懐之至ニ候、右等ニ付得御意度／事共御坐候へ共、何分繁激短日、無是非／大略いたし候、一、何ニよらず上木相成候ハ、早々差出し可申候、／猶又今般、祝詞正訓 一、出定笑語 二、／(古今) 妖魅考 一、鬼神新論 一、御入用之趣、／外ニ、万葉用字格 一、長州殊意 六冊／之事も被仰下承知いたし候、其内長州／殊意ハ未刻成不申候由、用事格ハ則／相求差上申候、祝詞正訓、妖魅考ハ各／壹部有合差上申候、鬼神論写し／出来次第差出し可申候、出定笑語は／二部之由、一部も出来合無之候、右ハ来年ハ／必上木相成可申候へハ、壹部も為写差上可申、／成丈御見合せ可被成候、

一、先御便ニ金壹両三朱御廻被下、後之／御便ニ御謝義として三百疋、御寄附分／千七百疋也、慥ニ受取申候、

一、先御便之内ニ、今村主今粕漬もの入／小桶壹ツ、御恵ニ可相成よし被仰越候而、／御懇情辱御事ニ候、但し右ハいまだ／相届不申候へと、其内到着可致候、必々／御配慮被下間敷候、

一、兼而被仰下候写本之内、(太曝) 古曆傳出／合申候間、今便差上申候、

一、上木ハ、此節巫学談弊出来か、り、／引続キ當年今日文伝、右出来

次第／玉櫛二ノ巻、其次ハ出定笑語と云／順ニ相成申候、出来次第差出し可申候、先々／御安悦可被下候、学事ハ日増ニ盛りニ／相成申候、御同慶希候、但し巫学、ハ／少し子細ある事ニ候間、御同志之外ハ／御咄し被下問敷候、先々右等之儀申上度如此候、以上、

霜月十三日

鉄胤

鶴乙ぬし御返事

尚々御一統様へ宜敷／御頼申候、以上、

本書翰の年次の推定については、結論としては、残念ながら年次不詳とせざるを得なかった。この問題への手がかりは、3・4両書翰でともに言及されている「太宰府建碑」一件である。これは平田門人である薩摩藩士葛城彦一³¹が、藩内の抗争から脱藩して筑前に亡命していた時、安政四年末頃から、福岡の商人楠屋総四郎、太宰府の旅館の主人松屋孫兵衛等を表面上の発起人として、太宰府天満宮境内に菅公遺誠と称される和魂漢才の碑³²を建てることを企画したことに始まっている。葛城は碑の建設のための賛助を各方面に求め、特に彼と縁の深い平田鉄胤や鈴木重胤、また下関の白石正一郎らの支持を得、特に鉄胤を通して各地の平田門人達の中から賛助者を多く得ている。

さて碑には傍に「有欲建碑太宰府天満宮者、應其需書之、安政五歲次戊午初秋、前中納言菅為定」³³と識してあるように、葛城らは題額と碑文との揮毫を菅原道真の後裔とされる公家の五條為定に依頼し、「安政五年初秋」に書かれたことがわかる。更に葛城の「伝記」によれば「此歳（安政五年）の冬、僧月照が幕府の追捕を避け、走りて薩摩に入らむと

する途次、潜に太宰府を過ぎり、天満宮を拝するや、刻は己に成りて猶ほ未だ立たざりしが」（傍点引用者）月照もこれを賛美して一首を詠じたという。これが正しければ、安政五年末には、碑文は刻されていたが碑は未だ建立されていなかったことがわかる。しかし葛城の「伝記」はその後の経過についての詳細な記述を欠いている。³⁵

ところで前掲の3番書翰中には次の如き件りがある。すなわち左の如し。

「一、太宰府建碑延引一件之事、委曲御承知、縷々御紙上之趣却而御氣之毒痛入候事ニ候、追而弥出来之節ハ宜敷御頼申候、

……中 略……

一、太宰建碑御奉納金四両也返却之事相済候事御承知之趣、当方ハ無是非候得共、御手数相掛候段、くれ／＼御氣之毒ニ候、乍去一ト先安心いたし候、」（傍点引用者）

この書翰は前述の如く安政六年のものである。とすればこの年には何らかの事情で「建碑延引」となったこと、そのためか、鶴屋などが出していた「奉納金四両」の返却という事があったこと、などがわかる。

さて次に本書翰中にもこの件について述べている件りがある。即ち左の如し。

「太宰府建碑弥出来之事ニ相成候ニ付、其段申上候所委曲御承知に而今便金四両也御差越し、慥ニ受取申候、竹田主御加ハリ、且川崎主御死去ニ付御息忠太郎殿といたし候事承知いたし候、筑紫へ早速差立申候、此度は無間違不遠返書参り可申候、必出来候事と存候間、御方々へ宜しく御伝声なし置可被下候、」（傍点引用者）

これを読むと「建碑」が「弥出来」となったので、それに応じて鶴屋達から送られてきた「奉納金「四両壹分」を鉄胤が受け取ったこと、鉄胤はそれを「筑紫へ早速差立」てたこと、奉納金賛助者に変更があったこと（竹田が加わり、川崎は息子に代った）、金額も増えたこと、などがわかる。

このように読んでみれば、3・4書翰の前後関係はどう考えられようか。①安政六年の「四両」が「四両壹分」に増え、②「竹田主御加はり」、③「川崎氏御死去」で名前が息子に変わったこと、等の点から考えて、4番書翰は3番より後であると言えるであろう。しかし前述の如く建碑の正確な年次が不詳であるため、4番書翰の年次は安政六年以後、更には翌万延元年以後であると言うことはできるが、何年と迄は決し難いままである（ここまですさか煩雑になるのを厭わず叙述したのは、一つには太宰府の和魂漢才碑の建立年次が万延元年以降であることを示すためである）³⁶。

ただ本書翰年次の決定について、もう一つの如く非常に気になる一条がある。即ち「義勇之人々所持之書付写し、大ニ御悦被下本懐之至ニ候、右等ニ付得御意度事共御坐候へ共、何分繁漱短日、無是非大略いたし候」というのである。この文はこれだけでは何とも判定し兼ねるのだが、本書翰が少なくとも万延元年以後という時（しかもおそらくその後そう長い時間は経なかったであろう）、ここで言う「義勇之人々所持之書付写」が、或は万延元年桜田門外の変に関わるものではないか、との想像を抑えることができないのである。しかしそれを証明することは全く不可能であるため、年次を確定するには至らなかった、という結論に

なる（猶次項①註37も参照されたい）。

さて書籍に関しては、

①弘仁暦運記考³⁷を鶴屋が受け取り、仲間に「配分」したこと。

②鶴屋から祝詞正訓、出定笑語、古今妖魅考、鬼神新論、万葉用字格、長州殊意、の注文があり、これに対し鉄胤は、祝詞正訓、古今妖魅考各一、万葉用字格（を買い求め）をすぐ送ること、鬼神新論は写本出来次第送ること、長州殊意は刊本が出来ていないこと、出定笑語は「来年必上木相成可申」それ迄待つてほしいこと、などを報じている。③あわせて「上木」状況として、巫学談弊が「出来か、り」、次に神字日文伝、玉櫛二ノ巻、出定笑語の順に「上木」の予定で、「出来次第差出し可申候」と述べ、あわせて「巫学々々ハ少し子細ある事ニ候間、御同志之外ハ御咄し被下間敷候」と注意を促している。

また本書翰で注目すべき記事は「先人肖像之儀……」とある部分で、鉄胤から弘前に篤胤の肖像画が送られたこと、それに対して「御一統方々金三百疋」が贈られたことがわかる。さらに注意すべきは篤胤の肖像画が少なくとも二種類あったことについての鉄胤の言及である。一つは今回鉄胤が鶴屋に送ったものであり（鉄胤は「十分と申二ハ無之、画工も心二任せ不申、先大抵ニ御坐候」ものと言うが）、もう一つは「秋田ニ而出来之」物である。これについては「拙宅家内共其外當地之者ニハ不得心ニ候へ共、彼地之人々よしと申居候事故、其俣ニ差置申候」と不満を表明している（この点については1番書翰においても同様のことを鉄胤が述べていることを前述した）。

なお鉄胤は篤胤の服装について次の如く述べている。即ち①羽織など

着用は通常の場合で、改まった場合には羽織を嫌い。②講書の節は必ず肩衣、③鈴屋大人靈祭其他発会の折は水干装束、略して、のしめ上下を着用、というのである。これは必ずしも肖像画における衣装について述べているわけでもないようだが、鉄胤が鶴屋に送った肖像画は一体どのような姿であったのだろうか、また秋田の肖像画とはどう違うのか、大いに気になるところである。と言うのも、現在筆者が見ることのできた篤胤画像は二種あり、一つは平田家蔵の篤胤像で諸書にも引かれるもので、これは羽織姿である。もう一つは京都大学蔵のそれで、水干装束³⁸である。弘前に残されている篤胤像についてはその存否を含めて大方の御教示を得たく思っている。

三、おわりに

以上鶴屋有節宛の平田鉄胤翰四通の紹介を試みて来た。全体を通して、鉄胤という人が、門人達に対して実に懇切に指導しており、篤胤書籍購入などについてもその応対が丁寧であることを見る事ができた。

また鉄胤が「諸国文通のミ忙しく候得共、追々学業の弘まり候事故、煩勞少しも厭ひ不申候」（一番書翰）と鶴屋に述べているところは改めて注目される。これは単なる筆まめという様な事で片づけることはできないであろう。宮地氏も述べられたように、超人的とも言える鉄胤の通信活動は、門人の結束を固めていくというだけではなく、門人達から寄せられてくる数多くの書翰が鉄胤に与える膨大な情報の意義が改めて肯首できるところである。一方門人達においても、このような形での鉄胤

からの通信が、多大の励みとなったことは明らかであろう。

また、この四通からだけでも知ることができる気吹舎の篤胤著書の出版・販布活動の活発さも注目される。各書物の出版状況や、筆工数十人を抱えての大量の写本の作成、にもかかわらず需要に対して必ずしも十分に応えきれない状況、なども知ることができる。渡辺金造氏は「篤胤の著作と出版」について、篤胤生前の時期における実態を、気吹舎日記等により紹介している。⁴¹そこにおいても出版活動などを取り仕切っている若き日の鉄胤の姿を見ることができ、没後、幕末における出版活動についても、例えば芳賀登氏の紹介された伊那谷の没後門人を中心とした弘仁暦運記考や古史伝の上木（助成）運動が知られているが、今後各地の門人宛鉄胤書翰が多く紹介されてゆく⁴²中で、塾蔵板の出版経過などもさらに明らかにされることを期待したい。

註

- (1) これらの書翰は青森県立郷土館蔵八木橋文庫所収のものである。
- (2) 書翰の解説において、岡宏三氏（当時青山学院大学院博士後期課程、現島根県立古代文化センター勤務）の協力を得ることがあった。記して謝意を表したい。勿論本稿における読解の最終責任は筆者にある。
- (3) 例えば各種辞典等においては、文政七年篤胤の養子となった後の記述が殆んど明治元年参与神祇事務局判事任、という如く幕末迄の活動や履歴に触れることがない状態である。これは『国学者傳記集成』以降同様である。

(4) 「幕末平田国学と政治情報」(田中彰編『日本の近世Ⅱ、近代国家への志向』所収、一九九四年、中央公論社)

(5) 同前、二二七～八頁。

(6) 『新修平田篤胤全集』別巻 名著出版。

(7) 「岩間 滴(ーしたたり) 文化八〇明治二四(一八一一～一八九一) 幕末、明治津輕の国学者、文人。通称市太郎。門外村(弘前市)に生まれる。弘前土手町の造酒業松屋に奉公す。好学の志あり。辛苦して文学を習い、のち百川学庵に漢籍を、鶴舎有節に俳諧と国学を学び石根ノ舎と号した。また狂歌を作り、小豆の実、小豆庵とも松瘤とも号す。有節、平尾魯仙らと親交し、平田派の皇学に傾倒して、平田鉄胤の門に入り、篤胤の没後門人帳にも名を連ねた。晩年は神官となった。没年八一。(青森県人名辞典)

(8) 津輕藩の研師、俳人の三谷句仏の子、愚舎と号した。

(9) 今村真種(ーみたね) 文政七〇明治一七(一八二四～一八八四) 津輕藩士。通商要太郎。歌人。号は桃舎。安政五(一八五八)年ごろから作歌を始めた。歌集に「桃の核」がある。(青森県人名辞典)

(10) 小野磐根(おの・いわね) 天保四〇明治二二(一八三三～一八八九) 弘前市櫛宜町津輕総鎮守八幡宮の宮司一〇代若狭守正武の長男。はじめ正房と名乗り一一代若狭守をつぐ。一七歳のとき京都にのぼり修業にはげみ橘家その他の諸家の神道祭儀式などの皆伝をうけ、さらに吉田家から神法免許をうけ任官して帰郷、明治に入って磐根と改めた。(同前)

(11) 平尾魯仙(ひらお・ろせん) 文化五〇明治一三(一八〇八～一八八

〇) 幕末のころの津輕の画人で、国学者。名は亮致、通称初三郎(八三郎)。別号蘆川、魯僊、安斎、雄山など。弘前紺屋町の魚商小浜屋に生まれる。幼時から学問を好み、松田駒水に経史を学ぶ。

画才を認められ工藤五鳳につき、さらに毛内雲林に師事して画道を修めた。また内海草坡に書法と俳諧を学んだ。……中略……天保八年三〇歳で家業を弟に譲り、画業と文筆に専念す。安政二年松前を遊歴し、函館で異人を見る。このころから有節、今村真種らと平田派の皇学を究め、元治元年江戸の平田鉄胤の門に入り、篤胤没後の門人帳に名を連ねた。明治九年明治天皇の青森行幸の際、暗門瀑布図などの画作を天覧に供す。没年七三。……下略……(同前)

(12) 兼平亀綾(ーきりょう) 明治維新のころ弘前在住の絵師。名は菊子。弘前和徳町小松屋(兼平)金平の娘。はじめ仙台へ行きその後江戸へ出て、深川あたりの商人へ嫁したが、夫に死別したので同郷の練屋藤兵衛(工藤白竜)といっしょになり弘前へ帰る。藤兵衛が死んでから弘前の町医者兼平清と結婚した。画は仙台の松本曲江を師として墨亀を得意としたことから亀綾と号した。……中略……明治一年弘前で没。(同前)

(13) 下沢保躬(ーやすみ) 天保九〇明治二九(一八三八～一八九六) 津輕藩士鷲蔵の長男。国学者、史家。通称八三郎。閑雲と号し、また鏡湖楼、花陰、玄風ともいった。微禄の藩士から身を起こし辛苦の中に人となった。性来、学問を好み、歌道を長利仲聴に学び、文久元年(一八六一)には平田鉄胤の門人となり国学を学んだ。明治二年京都出張所詰公用取次役、筆生を命じられ、近衛家の執事をも

兼ね、中央の学者、歌人と交わる機会を得た。同四年帰郷して津軽全域の神社仏閣の調査に当たり、のち岩木山神社の神官となった。

……下略……（同前）

(14) 「気吹舎門人帳」より作成した津軽・弘前の入門者数の年次別一覧は左の通りである。

年次	人数
安政4	6
文久2	1
元治元	4
慶応2	2
3	2
明治2	1
3	1
4	1
計	18

なおこの一八名についての身分別内訳は武士六、神官三、町人九となった。

(15) 明治四年迄の陸奥国全体の門人数は一七一名を数えることができた。出羽久保田の人、名は以忠、篤胤門人、安政五年没（六〇）。『国学者総覧』一二五頁。

(16) 白川家、弘化二年三月のこと。

(17) この「年譜」とは鉄胤の「大壑君御一代略記」をさすと思われる。

これは安政三年当時未刊であったことになる。現行版本「玉櫛」に附載されるようになったのは、慶応三年以後である。

(18) 谷省吾『平田篤胤の著述目録 研究と覆刻』（昭和十一年、皇学館大学出版部）。

(19) 前掲書四二―八三頁に全文覆刻されている。なお同書八一頁に別筆奥書として「此書は安政四丁巳五月中浣鉄胤先生より送り給りたる

もの也 河合勝文家蔵」とあり、鶴屋に対しても同様に送られたと考えられる。

(20) 前掲書一〇一―一〇六頁。

(21) ちなみに今回の注文書籍の価格を同史料から拾ってみると左の如くなる。

毀誉相半書（写本） 金一步ト五匁
 三易由来記（ク） 金一步ト朱ト五匁五分
 神代系図 小折本（板本） 銀五匁五分
 大祓詞 （ク） 銀二匁五分
 天津祝詞考 （ク） 銀四匁五分
 八家論 （ク） 銀二匁、

なお古史伝は、この値段表ではすでに開板後のものとして扱われており、また玉櫛については全体（全十巻）として板本金一両二朱とあるが、一巻の値については不詳である。

(22) この時のコレラ流行については、主として富士川游『日本疫病史』

（昭和四四年、平凡社東洋文庫）二一三頁―二四五頁など参照のこと。同書二二三―二二四頁引用の「和蘭医官ボンベ・ヴァン・メルヴォルトが長崎奉行に上りたる書」には長崎で同病発生時に「亜墨利加蒸気船『ミシシッピー』に於いても右様の腹痛多人数御座候につき、右病氣は究めて流行のものと奉存候」とある。また同病の原因について世人は様々の臆説をなして「或は水道に毒ありとて水道の水を吞まず、或は亜墨利加人が悪しき狐を残し置きて人につけて、日本人を悩ますものなりとし、或は妖怪変化の所為なりと

し、これを畏るる等、人心の乱雑名状すべからず」(同書二二六頁)という情況が伝えられている。鉄胤書翰中にもこのような噂が伝えられているのは前引の通りである。

- (23) 例えば富士川前掲書に次の如き記述があった。「安政五年第二次の流行に際しては、蘭方医家は、当時長崎にありし和蘭医官ポンペ・ヴァン・メールデルヴォールト口授の説と：諸家の書二載するところとに拠りて、虎列刺病者を療したり。その説に『第一腸胃の刺衝過度を降和し、内部の血液鬱積を疎散し、痙攣疼痛を寛解し、暴吐下を鎮止せんことを要す、次いで揮発衝動の劑を用ひて神經血脈の虚脱を防ぐべし』とありて、全身温泡、肢体摩擦、発汗劑、心劑及び腓腸部芥子泥貼用、浴法、蒸氣浴、刺絡、吐劑、阿片、神經藥等をこの目的に応用することを推称したり。(前掲書二四四頁、なお傍点は引用者)この引用中傍点部「腓腸部芥子泥貼用」とあるところが、鉄胤の伝える「療方」に符合すると見ることができ、この意味では全くの誤りとは言えないだろう。

- (24) 故越中守は松平定信のこと。「宝舟」とは谷文晁筆、松平定信讀、異国船図(淡彩木版)、「此船のよるてふことを夢のまもわすれぬは世の宝也けり」(人物叢書『大黒屋光太夫』一三九頁)。

- (25) 弘前八幡宮のことか。

- (26) 「仙境異聞」「勝五郎再生紀聞」はともに『新修平田篤胤全集』第九卷所収(名著出版刊)。

- (27) 篤胤におけるこのような関心の意味については、拙稿「鬼神・怪異・幽冥―平田篤胤小論―」(『日本近世史論叢』下卷所収、昭和五

九年、吉川弘文館)において論じたことがある。

- (28) 渡辺金造『平田篤胤の研究』(昭和一七年、六甲書房)一七〇頁、二〇七頁「篤胤と天狗小僧」特に二〇一頁。

- (29) 同前二〇七頁。

- (30) この問題については早く芳賀登『幕末国学の展開』(昭和三八年、塙書房)一〇一頁に指摘がある。

- また山内修一『薩藩維新秘史葛城彦一伝』(昭和一〇年 刊行会)二〇四―二〇六頁参照。

- (31) 葛城彦一はもと竹内伴右衛門と称し名を經成といった。天保九年平田門に入門、嘉永二年平田鉄胤から、師篤胤の書「三五本因考」の刊行に際し序を書くことを求められた。彼は鈴木重胤とも親しく、重胤の著「世継草」の後序を書き、また「延喜式祝詞講義」の一部の校訂なども行っている。彼は薩摩藩における斉彬派であったが、藩内の抗争に敗れ脱藩亡命に至ったことは本文の如くである。(芳賀前掲書、山内前掲書参照)

- (32) 山内前掲書二〇四頁によれば「菅公遺誠」は次の如くである。

凡神国一世、無窮之玄妙者、不可敢而窮知、雖学漢土三代周孔之聖經、革命之国風、深可加思慮也、

- 凡国学所要、雖欲論涉古今究天人、其自非和魂漢才、不能闢其閭奥、同前書二〇五頁。

- (34) 同前。

- (35) 同前書では「工事漸く功を竣はるに及び、種々の故障を生じ、余儀なく天満宮の留守職信全権大僧都の斡旋と名義とを借り、辛ふじて

祠後の僻境に建設するを得たり」(二〇六頁)とだけ述べて年次を欠いている。

(36) 或は先学の研究があるやも、と思つたが管見の範囲では不明であり、御教示を得たい。

(37) 弘仁暦運記考については、信州伊那地方の平田門人達による出版助成の運動が行われ、その完成は安政七年四月である。とすれば本書翰で同書を手入との記事があるところで、本書翰が安政七年Ⅱ万延元年であるとの推測の支えにはなると言えよう。なお前述出版助成運動については芳賀前掲書参照。

(38) 図版を掲示できれば良いのだが、都合もあり、ここでは例えば三木正太郎『平田篤胤の研究』、渡辺金造『平田篤胤研究』等の扉写真版を参照されたい。

(39) 同様に田原嗣郎『平田篤胤』(人物叢書、吉川弘文館)扉を参照。

(40) なお情報としては大変古いが、管見の範囲内では秋田県内にある篤胤肖像について、石井周蔵「平田先生の肖像について」(『秋田教育』平田大人九十年祭記念号、昭和七年九月秋田県教育委員会)には七種を挙げ、また『草園』二三号(草園社、昭和一八年一月)の囲み記事「平田大人の肖像」も七種を挙げている。勿論現蔵状況等は一切不明である。青森県弘前地方における状況等知りたく思う次第である。

(41) 渡辺前掲書 三一六―三四七頁。

(42) 芳賀前掲書 一三八―一四四頁。

(43) 例えば「岡山手紙を読む」の同人諸氏はその機関誌『書簡研究』

一―五において、篤胤門人業合大枝宛の文政Ⅰ嘉永にわたる平田鉄胤書翰を継続的に紹介している。

(ぬまた・さとし 青山学院大学文学部教授)